

ゆらぎ、碧い鳥、

大島寛史

登場人物

ユカリと周りの人たち。彼氏、友達、先輩、など。

きつと夢だと思う

まどろみに誘われて

手に入れたはずだった

あおいとりさえ

夢だったのかもしれない

繋がっていますか？

一本、電信柱が立っている。
斜めに立っているそれからは、1方向に電線が伸びている。
電信柱の足元は、砂のような紙のようなもので埋もれている。
それは電信柱に近いほど高く、すぐに平坦になる。
そこかしこに椅子が置いてある。様々な形の椅子。色は全て、同じ青。
見たことのない青空の色。或いは記憶の中の夏の空の色。

音が聞こえる。

河川敷で野球をしているようだ。近くの橋を車が行く。自転車はベルを鳴らし、豆腐屋の笛の音もする。誰かの笑い声。ボールを弾く音。響く声。
向こうの橋を電車が渡る。すべての音が電車の行く音に飲み込まれて。
静寂。少しして、また電車の音が遠くで聞こえる。踏切の音もする。
明かりが点く。女が一人いるのが、少しずつわかる。女は椅子に座っている。
ただ一点を見つめて、動かないでいる。
電車は走り続けている。
少し経ち、電車の音、遠ざかっていく。同時に、女が居るところも暗くなり、見えなくなる。
代わりに、別の場所に女の姿が現れる。

ユカリ

覚えていない。いつから私は、こう、なのだろう。
だけど、はっきりと覚えている。

電車の中。私の向かい側に座る彼女の。どこを見ているわけでもなく。
ただ、一点を見つめている。なにも無い、ということを見ているような。
その、彼女の、世界に一人でいるような、彼女の、眼を。
はっきりと覚えている。……忘れられないでいる。
忘れてはいけないと、強く思っている。
私の、動かせなくなった小指が、そう願っているように感じている。
私が、ようやくつかまえた、きつと碧い鳥が、そう、歌っている。

電車の音、次第に大きくなり、彼女の姿消えていく。
と、そこで。

ユカリ

ねえ！

電車の音が止み、ユカリを照らしていた明かりも元の明るさになる。

ユカリ ねえ……覚えてる？

ユカリが語りかけると、先ほど見えなくなった椅子に明かりがあたり、座っていた女性がユカリの方を向く。

ユカリ 覚えてる？

女性は黙ってユカリを見つめているだけ。

ユカリ あなたは覚えていますか？私の小指の、このわけを。

女性は黙ってユカリを見つめているだけ。

もう一度問いかけようとしたとき、鳥の鳴き声がする。

二人、そちらを見る。満開の桜が咲いている。

ユカリ 私は毎年この桜を見にここへ来ます。脇道に入ったところに一本だけ

あるこの桜の木は、人知れず、春の訪れを喜んでいます。

約束をした桜の木です。でもその約束をもう誰も覚えていません。

忘れられた約束は、もう果たされることはなく、ただ、

風によって消えていくだけ。しかし、毎年、一方的に果たされる約束は、

忘れられることもなく、春の風にしがみつき、そこに存在し続けるのです。

それはなんと、酷い話でしょうか。約束だって、忘れられた方がいいに

決まっています。けどどうしても、果たさずにはいられないのです。

女性 それは。

ユカリ え？

女性 それは何のタメに？

ユカリ 何のタメ……

女性 無駄だと思ふな。

ユカリ そんなこと

女性 無駄だよ。

音楽。暗転。

扉がいささか強く閉まる音がして。

明かりが点く。椅子の上、足を抱いて座っているユカリ。

ユカリ 最悪。またやってしまった。私の口は、私の思いをちゃんとしゃべってくれない。

ユカリ いつからだろう。こんな風になってしまったのは。些細なコトで言い合いになり、いつも、こうなる。私はこの部屋に一人だ。

まだ温かい二つのマグカップ。賑やかなテレビの音。

部屋の外は心地のいい風が吹いているのに、私の胸は、落ち着かない。怒りと哀しみと、寂しさが、かきむしり、壊す。

後悔の波が止めどなく押し寄せ、涙をこらえるのに必死だ。

ユカリ 緊張すると言葉が出なくなる。興奮すると、上手く言えなくなる。

小学生の時、教科書の音読が苦手だった。漢字が読めなかった。

皆の目と耳が私に集中する。立ち上がった、教科書を読む。

クスクスと笑い声がある。先生が注意する。

私は溜まらず泣いてしまった。冷やかした男子が叱られる。

私は、一層、泣く。そういう小学生だった。

あの時、必死に読んだひらがなやカタカナは、さぞおかしかったろう。

どうして読めないのか、苛立っていた子も居るだろう。

でも、精一杯だった。あの時の私の。

それは今でも変わらず。私はあの人の前でも上手く喋れなくなっていた。

一番分かって欲しい彼。一番伝えたい彼の前で、私は、

もう、喋れない。

ユカリ それから、丸一日、私は部屋の椅子の上に座っていた。

彼は帰ってくる気配も無ければ、連絡も無い。気分を落ち着かせるために飲んだ

コーヒーも飲み過ぎては気持ちが悪くなる。ほんやりと窓の外を眺めるなど

してみても、時計の針は一向に進まず、何をしていても集中出来なかった。

このまま、終わったことになってしまっただろうか。

このまま、今までの時間が溶けて、無くなってしまうのだろうか。

積み重なった気持ちは崩れ、思いは薄れ、ひとりのくらがりへ落ちていくんだ。

ユカリ 些細な喧嘩だったのに。今度こそ、おしまいなんだ。私たちは、別々の道を歩く。もう、このテーブルで笑い合わず、あのベッドで手を握らない。どうしてこんなに私たちは、疲れる関係になってしまったんだろう。もっと気楽で、笑い合える、心のよりどころだったはずなのに。いつからかお互いが重荷になり、目を合わせなくなった。終わりに近づいているだろう心配を、お互いが否定していたような気がしていた。それは、私だけ、だったんだろうか。彼は着々と準備、していたんだろうか。

扉の開く音がする。いつの間にか暗い部屋。明かりが一筋差し込む。音のした方を見るユカリ。視線の先、現れたのは、別の女。

女性 そういうときはさ。

ユカリ ……え？

女性 思い出に帰ろう。

ユカリ なに？

女性 思い出はいつも、やさしい。辛かった記憶さえ、優しく包み込んでくれる。

それは、残酷に、自分を甘やかしてくれるんだ。さあ。

ユカリ ……それは。

女性の手には一冊の絵本。

女性 そう。それは、大学生の頃。君の参加していた絵本サークル「にじいろゼブラ」の作品だ。

ユカリ 共同で本を作った。オリジナルの絵本。私は絵を描いた。

物語は……

女性 トモミが作った。

ユカリ うん。トモミ。

女性 さあ。

女性、ユカリに本を差し出す。ユカリ、受け取り、ゆっくりと開く。すると別の場所に、先輩が現れる。

先輩はゆっくりと絵本を開き、音読を始める。

仲間達、暫く聞いているが、やがて。

トモミ あの。先輩。

先輩 ん？今、いいところなんだけど。

トモミ でもあの、皆、揃ったんで。

先輩 ああ、そう。集まっちゃったか。照れるなあ。

トモミ そうでなく。今日の活動、始めたいんですけど。

先輩 ああ、そっちね。そっち。

トモミ はい。

先輩 はい、お疲れ様。

各々、挨拶をする。

先輩 じゃ、あとよろしく。

トモミ はい。えー、では今日からいよいよ、ミーティングを重ねてきた、

共同創作絵本「あおいとり」の制作に取りかかろうと思います。

イラスト班、準備はどうですか。

部員の一人が立ち上がる。

部員A はい。ユカリと手分けして下絵の制作から進めています。

今のところ貰ってるお話の流れから拾えるところだけ拾って進めてますが、

正直、お話があって、絵があると思うので、ストーリー待ちです。ね。

ユカリ うん。

間。 気まずい静寂。

トモミ 言われていますよ、先輩。

先輩 ま、気持ちはわかるよ。

部員A いや、気持ちってどうか。

先輩 まあまあ。そう次から次に溢れてくるわけじゃないんだよ、話ってるのはなあ。

部員B え、俺すか。

先輩 ストーリー班。

トモミ 先輩。今日からってどうか、今日には始めないと、間に合いません。

先輩 いや……分かってる。分かってるよ。しかし、どうにも……。

先輩、なにか文章が書いてある紙を取り出す。

トモミ なんだ、あるじゃないですか。

先輩 いや、うん。

部員A 貰えるんですか、続きってどうか、細かい部分。

先輩 一応……、あるには、あるんだ。……。

先輩、少し逡巡して、紙を破る。

騒然とするメンバー。

先輩 すまん、もう少し、時間をくれ。

先輩、部屋を出て行く。追いかける部員B。

ページの端々を拾ってあわせようとする部員もいる。

泣き出す者もいる。

トモミ ね、ユカリ。

ユカリ ……ん？

トモミ イラスト班って、今日お話があがってなかったら、間に合わない？

ユカリ んー、きついけど、ページ数減らすとか、徹夜で頑張るとか。

やりようは、あると思うけど……。

トモミ 私、書くよ。

ユカリ え？

皆、トモミを見る。

トモミ とりあえず、先輩のことは、前沢に任せて。私たちは私たちが

出来ることやろう。もう仕方ないよ、やるしかない。

部員A でも……トモミ……

トモミ 書いたことないよ？ないけどさ。私の眠れる才能ってやつが、

開花するかもしれないじゃん？

ユカリ やって、みる？私たちも、結構きついスケジュールになるけど。

部員A 私は全然、大丈夫。

ユカリ みんなは……？

それぞれに同意する。

トモミ よし！じゃ、始めよう！

トモミ、紙を広げる。みんな、車座になり、話を作っていくようだ。
この様子をずっと、外から見ている、現在のユカリ達。

ユカリ 火事場の馬鹿力、とでも言うのだろうか。今まででは考えられない団結力を
発揮した。

メーテルリンクの「あおいとり」では、幸せは、実は身近な、一見すると普通の、
そういうところにあるのだと言う。本当にそうかと、思うところから着想を得て、
本当の、ほんとうの幸せを見つける話にするんだと先輩は言い

「新時代版あおいとり」だ」と意気込んでいたが、その構想は日の目を見なかった。
代わりに、私たちが選んだのは、「自分にデキもしないことを言い、

周りに迷惑をかける人間をこらしめる話」追い込まれたときにありがちな、
「自分たちの置かれている今の状況を描く」というやつだ。私たちはみな、
それはアリなのか？という気持ちもあったが、「私がやる」と宣言した

トモミの提案となれば、首を縦に振るしかなく、スケジュールぎりぎりです、
私たちは絵本を完成させた。皆、大いに喜び、笑い、泣いた。

先輩、駆け込んでくる。後を追ってくる、部員B

部員B 先輩！

先輩 しつこいやつだなお前も！

部員B 戻りましょうって。

先輩 俺は、旅に出る。

部員B はあ？

先輩 しあわせは、どこにあるんだ？自分のウチか？そんな馬鹿な！

しあわせは、しあわせはなあ！

部員B 先輩……？

先輩 どこにあるかわからないから、それを探す旅に出るんだ！

決して締め切りを守れなかったから逃げるわけじゃないぞ！

じゃあなあ！

先輩、逃げ去る。

部員B ちょっと！先輩！待って！

部員B、追いかける。

ユカリ 私たちが絵本を作っている間、先輩は本当に旅をしていたらしい。追いかけていった彼も旅先までついて行ったようだ。

日本各地の観光名所を回り、名物を食べ、大いに遊んだ、そうだ。

先輩 これが、幸せなのかも、しれないな。

トモミ 先輩！

先輩、トモミに首根っこをつかまれ、説教される。

ユカリ 5時間に及ぶ説教だったそうだ。

先輩 これは、幸せでは、無いな。

トモミ 何か文句が？

先輩 いえ、何も。

ユカリ そして、トモミはこの後、本当に才能を開花させた。

物語を生み出すことの苦しさで楽しさにとりつかれた彼女は、

大学サークルの枠を飛び出し、様々な媒体で自分の世界を紡ぎ出す。

小説を書いていたこともあった。絵本を自费出版したこともある。

地域の合唱団のオリジナル曲の作詞を手がけたとも聞いた。

そして今は、小さな劇団で脚本を担当しているらしい。

「あの時、先輩が逃げてくれて良かった」と、彼女は今でも口にする。

ユカリは、一冊の絵本を誇らしげに抱えている。

トモミ入ってきて、声をかける。

トモミ 懐かしいね、それ。

ユカリ え？ああ。

トモミ 先輩が逃げてくれて良かったわ、ホント。

ユカリ また言ってる。

トモミ ついに直接言ったからね。

ユカリ え、うそ、会ったの？

トモミ うん。

ユカリ なんで？集まったの？

トモミ 違うよ。観に来たの。

ユカリ 何？演劇？

トモミ びっくりしたよ。何の連絡もなしにさ、居るんだもん。

ユカリ そうなんだ。

トモミ 前沢は知ってたみたいだけど。

ユカリ あ、元氣、前沢くん。

トモミ うん。まあ。

ユカリ 順調ですか。

トモミ 同棲、はじめた。

ユカリ え、そうなの。

トモミ うん。家賃折半。

ユカリ へー。

トモミ 連絡あったんだってさ、前沢には。

ユカリ 仲良いね。

トモミ 日本一周した仲ですから。

ユカリ 男の友情だね。

トモミ 何あれ、冷蔵庫、空っぽだったよ。

ユカリ うん。

トモミ 適当に、いれといたから。あとで整理しといて。

ユカリ うん、ありがとう。あ、お金。

トモミ いいよ。

ユカリ え？

トモミ で、どうなの、具合。

ユカリ うん。

トモミ うんじゃわかんない。

ユカリ ……。

トモミ 病院は。

ユカリ 行っていない。

トモミ なんて。

ユカリ ……。

トモミ みせて。

ユカリ、両手を身体の後ろに持って行く。

トモミ ……。

ユカリ ……。

おずおずと、手を出す、ユカリ。

トモミ、左手をゆっくりと触る。

トモミ 小指だっけ。

ユカリ、頷く。

トモミ ……うわ。

ユカリ ね。

トモミ これ、いつから。

ユカリ 一週間前。

トモミ 彼氏は。

ユカリ その前の日、喧嘩して、そのまま。

トモミ なにそれ。これ、感じないの？

ユカリ うん。わかんない。なにも。

トモミ ……石みたい。

ユカリ 検索しても、でてこなくて。

トモミ ……病院。

ユカリ 外、出たくない。

トモミ あのねえ。

ユカリ 出たくないの。

トモミ ……。わかったよ。

トモミ、立ち上がる。

トモミ じゃ、私これから稽古だから。

ユカリ あ、うん。ありがとう。

トモミ いいって。なにかあったら、すぐ連絡してね。

ユカリ うん。

トモミ それじゃ。

トモミ、部屋を出て行く。

ユカリ 冷蔵庫の中には、私の好きなものがたくさん入っていた。

トモミ、ありがとう。タッパーに入ったものもあった。

何も言わなかったけど、トモミの手作りだろう。

空っぽだった冷蔵庫が彩られたのを見て、少し気持ちが

楽になったような気がする。……今日は、お風呂にでも入ろうか。

冒頭部分に出てきた女性、現れる。

女性 その指は、元に戻るのかな。

ユカリ ……戻るよ。

女性 昨日よりも、少し広がってるのにな？

ユカリ 気のせい気のせい。

女性 多分、明日には、薬指も動かなくなるかも。

ユカリ そんなことない。

女性 段々広がって、手首、左手、どんどん石になってく。

ユカリ やめて。

女性 このままでいいの？

ユカリ 外に出なきゃ。

女性 外は怖いよ。あつという間に連れて行かれる。

ユカリ いつまでも夜。どこまでも雨。

女性 でも、逃げた鳥を捕まえに行かないと。

ユカリ 大丈夫、その内戻ってくる。

女性 猫に襲われているかも知れないし、えさがなくて飢えているかも。

ユカリ 大丈夫。大丈夫。大丈夫。

女性 そもそも本当に、あおいとりか、わからないし。

ユカリ 逃がしても、問題無い。

女性 一人でも、平気。

ユカリ 私自身が、あおいとり。

女性 幸せは、身近なところにある。

ユカリ タップパーに入った手作りのおかず。お湯の出るシャワー。

友達と繋がるスマートフォン。雨風を感じない部屋。

幸せ。幸せ。これが、幸せ。

女性 私は大丈夫。これからも、今までも。

ユカリ 大丈夫だった。

女性 おめでどう。

女性、姿を消す。

ユカリ、息を整える。ふと、左手の感覚に気が付く。

おそろおそろ、左手に触れてみる。

ユカリの息は整わない。

ユカリ 左手の小指の件。まさか広がるとは。なんだろ、これ。

2.

学生服姿の男女が現れる。

先に行く男子と後を追う女子。

女子 ねえ。

男子 ん？

女子 これ。

女子、紙の小さな袋を差し出す。

男子 なに？

女子 ……。

男子 なんだよ。

男子、中を開ける。と、小さなストラップが入っている。

男子 ストラップ？

女子 四つ葉のクローバー。

男子 うん。

女子 こっちは、私の。

女子、二つの内、一つを男子の手から取る。

女子 そっちが、君の。

男子 くれんの。

女子 つけてくれる？

男子 ……うん。

男子、手を差し出す。

女子 つけないの？

男子 あとで。

女子 わかった。

女子、自分の分のストラップをしまつて、手を繋ぐ。

ユカリ あの頃の永遠に、期限は無かった。
今日と同じ明日が来ると思っていたし、
土曜日と日曜日は退屈だった。
私には、想像することも出来なかったんだ。
安物のストラップはすぐに切れて無くなってしまふことも。
晴れの日は、そんなに続かないということも。

学生服の男女現れる。

男子 見て。すっごい晴れてる。
女子 そうだね。
男子 ……。
女子 ごめん。
男子 え？なにが。
女子 ごめん。
男子 だから、なにが。
女子 笑えないよ、私は。
男子 ……え？
女子 君みたいに、笑ってられない。
男子 ……。
女子 ……。
男子 まだ怒ってるの？ストラップ。
女子 別にそういうわけじゃないけど。
男子 でもあれからじゃん。ユカリの様子が変なの。
女子 変って。
男子 新しいの買って、喜んでくれたじゃん。
女子 嬉しかったよ。
男子 それでも、駄目なの？
女子 別に、ストラップ無くしたからどうかじゃないんだよ。
ただ、無くしたことを怒ると、新しいの貰って嬉しいのは、
違うんだよ。それぞれ、違うことなんだよ。無くしました、マイナス5点。
新しいの買いました、プラス5点、だからプラマイ0です。っていうことじゃ
無いんだよ。
男子 ……ごめん。わかんないよ。
女子 ごめん。別にだから、そういうことじゃ、無いんだよ。

男子 ……え？

女子 私じゃなくて、君だよ。変わったの。

男子 俺？

女子 そう。

女子、去る。男子、追う。

ユカリ その日から、お互いに少しずつ。それぞれが、お互いがおかしい、と思う

速度で、私たちはズレていった。降ったり止んだりしながら、

次の冬、私たちの恋愛はおわった。

私たちの永遠には限界があった。そういうことだ。

ユカリ 四つ葉のストラップは、私が初めて買った、おそろいのアイテムだ。

家族と出かけた先のお土産屋さんで見つけたありふれたそれ。

気づけば私はそれをレジに持っていった。

渡すときはドキドキしたし、後日、彼の携帯電話に付いているのを

見つけたときは、とても嬉しかったし、彼も照れくさそうにしていた。

なんだか、特別な感じがしていた。

ユカリ 数日前。私は、彼を見かけた。彼はとても、元気そうだった。

インターネットは、時々、とても残酷だ。いきすぎたモラルの警察の徘徊や、個人の関係を電子メールで終わらせたりすることではなく、

情報を、要不要関係無く、時も場所も考えず、勿論気持ちなどくみ取らずに、与えてしまうことがある。何気なく開いた、SNS。

「あなたの友達かも？」という欄に、彼は現れた。

…友達って何だ？

ユカリ まさかの発見。どうしたらいいんだろう。いや、そんなことは分かってる。

別の場所。トモミが稽古場へと向かう途中、

一人の男——先輩が姿を現す。

先輩 あ、あ、あ、あの。

トモミ は、え。

先輩 よ、よお。

トモミ ……先輩？

先輩 久しぶり、元気か。

トモミ いや、ついこの間会いましたよね？え、なんですか？

先輩 ま、まあ、たまたま、偶然？通りがかって、見かけただけで。

トモミ あ、そうなんですか。あの私これから稽古なんです。

先輩 あ、うん、知ってる

トモミ え？

先輩 いや、知らない。

トモミ 先輩？

先輩 え、あ、そうだ、あの偶然、偶然なんだけどさあ、

トモミ はい？

先輩 俺も、書いてみたんだよ。

トモミ ……。

先輩 こないだの、演劇？見てから？俺も、書いてみたのよ、……脚本。

トモミ は？こないだのって、先週の？

先輩 そう。結構大変な。ホン書くのって。

トモミ はあ、そりゃまあ……そうですけど……

先輩 で、それをその、まあ、良ければ、読んでみるか？っていうか、その

なんていうんだ、あの

トモミ 持ってるんですか？

先輩 まあ、データ、データだけど

USBを取り出す。

トモミ ……いいですよ。

先輩 え？

トモミ 読みます。私。

先輩 いや、忙しかったらわざわざ無理して時間作ってその……

トモミ 忙しいけどわざわざ無理して時間作って、読みます。

借りてもいいですか。

先輩 あ、あ、お、おう、良いよ、勿論。

トモミ 感想、メールしますね。

先輩 お、おお。

トモミ　じゃ、先輩、わざわざありがとうございます。

先輩　あ、いや、別に、そんなつもりじゃ、偶然、ぐうぜんさ。

先輩の声にかぶるようにして、スマートフォンに着信音が鳴る。
ユカリ、耳に当てながら出てくる。

ユカリ　もしもし。

トモミ　あ、もしもし、ユカリ？

ユカリ　うん、どうしたの？

トモミ　稽古場行く途中でさ、先輩に会って。

ユカリ　え、偶然？

トモミ　んー、待ち伏せされてた。

ユカリ　待ち伏せ？なんで。

トモミ　先輩ね、脚本書いたんだって。

ユカリ　脚本？

トモミ　この間観に来たって話したでしょ、私の芝居。

ユカリ　うん。

トモミ　それに触発されて、書いたんだって。

ユカリ　なにそれ。

トモミ　単純だよな。

ユカリ　それで？

トモミ　読んでくれていわれて。

ユカリ　読むの？

トモミ　まあ、読むくらいはしてあげようかな。

ユカリ　作家先生、お優しい。

トモミ　そんなんじゃないって。ユカリも読む？

ユカリ　え？私はいいよ。

トモミ　好きだったじゃん、先輩のお話。

ユカリ　あれは、絵本でしょ？

トモミ　絵本も、脚本も、同じ本だよ。

ユカリ　そうかなあ？

トモミ　大きく、くくればさ。データで貰ってるからさ、送っとくよ。

気が向いたら読んでみて。

ユカリ　うん、ありがと。あ、ご飯も。ありがとね。

トモミ　ううん、大したものじゃなくてごめんね。

ユカリ　いやいや、大感謝ですよ、先生。

トモミ ちよつとユカリ。
ユカリ ごめんごめん。ね、トモミはさ。
トモミ ん？
ユカリ 前に付き合ってた人と再会したこと、ある？
トモミ どうしたの、突然。
ユカリ ある？
トモミ まあ、そりゃ、あるけど。
ユカリ なんで？
トモミ 同窓会、だったかな。
ユカリ どうだった？
トモミ どうだったって……
ユカリ ……ドキドキ、した？
トモミ どうか……
ユカリ したの？
トモミ まあ、そりゃあ、少しは意識、したかもね。
ユカリ 何かあった？
トモミ 何かって・
ユカリ その後。少し意識して、再会して、その後。
トモミ なに、どうしたの、ユカリ。
ユカリ 私、見かけたの。
トモミ 見かけた？外出たの？
ユカリ いや、外には出てない。
トモミ は？じゃあ何、宅急便のお兄さんになってたとか？
ユカリ インターネットで。あの、ほら、友達かもって、いわれて。
トモミ フェイスブックとか、ツイッターとかで？
ユカリ ……そう。
トモミ それ、見かけたっていう？
ユカリ ……ごめん。
トモミ それで？ドキドキしてんの？
ユカリ いや、そういうわけじゃ……。
トモミ 彼氏と上手くいってないしね。タイミング的には、いい、とも、わるい、とも、
言える、絶妙なタイミングだ。で、一個前の相手？
ユカリ いや……一番最初の、相手。
トモミ へー。いつ。
ユカリ 高校。
トモミ へー。連絡は？

ユカリ ずっと、取ってなかった。

トモミ コンタクト、した？

ユカリ してないよ、しないよ、なんでよ。

トモミ ドキドキしてんでしょ？

ユカリ だからしてないって。

トモミ じゃ、なんでそんなこと聞いてきたの？

ユカリ トモミだったらどうしたかになって思ったの。

私には、コンタクトとる勇氣も、友達申請する勇氣すら無いから。

トモミ どんな別れ方したかにもよるだろうけどさ、

別にいいんじゃない？繋がってみても。

ユカリ えー？

トモミ 嫌なら無視すればいいじゃん。

ユカリ いや、それも、なんかさあ……。

トモミ ま、私は絶対連絡取らないけどね。ろくなコトになんないし。

ユカリ え？え？

前沢（の声） だいまー。

トモミ おかえりー。帰ってきた。

ユカリ あ、じゃあ、切るね。

トモミ え、いいよ別に。

ユカリ いいって。また、連絡する。

トモミ ちよっと、ユカリ。

電話、切れる。

前沢、入ってくる。

前沢 だいま。

トモミ まったく。タイミング悪いんだから。

前沢 え？

トモミ 間が悪いつつたの。役者として致命的ね。

前沢 え、俺、なんかした？

トモミ ……うん。

前沢 何したの？俺。

トモミ 帰ってきた。

前沢 そりゃ、帰ってくるでしょ、ねえ、なに、何の話？

前沢、トモミを追って去る。

ユカリ　ろくなコトになんない……か。……。

ユカリはスマートフォンを見つめている。
文章の書いてある物を持った男女それぞれ現れる。

男　時、日曜日の昼間。12時過ぎ。場所、ケンジロウとナナの住むアパートの一室。

天気は晴れ。夏。座ってクッションを抱いているナナと、

それを見下ろしているケンジロウ。

部屋の中は整然としている。のれんがかかっており、奥は玄関へと繋がっている。
引き戸があり、その向こうにも部屋があるようだが、戸は閉まっていて見えない。
だから、なんでそんな言い方になるんだよ。

そっちでしょ。

お前だろ？

お前とか言わないでよ。

でかい声だすなよ。

出すわよでかい声。出させてるんでしょ。

やめろって。

出てってよ。

は？

なんか、今話しても意味ない気がするし。

そうかよ。

うん。そう。

だから、なんだよ、その言い方。

ケンジロウ、ナナの抱いているクッションを掴む。

ナナ、抵抗するが、ケンジロウ、クッションを奪う。

そして、ベッドの上に投げつける。

もう何度目だよ、こういうの。

別に数えてないけど。

そういうの、直すんじゃないのかよ。

あんたが直らないから、私も直らないでしょ。

人のせいにするなよ

あんたがね！

ケンジロウ、部屋を去る。扉が無造作に閉まる。

ナナ、クッションを抱えて顔を埋める。音楽。転換。

……これ、どっちが悪いの？

女でしょ。

女 男じゃないの？

男 ……だって、何度も言ってるわけでしょ？このケンジロウは。

女 そう書いてあるけど、本当にそうなのかな？ナナには伝わってないのかも？

男 伝わってるにせよ、伝わってないにせよ、話したことがあるか無いかが、

ポイントじゃない？

女 話してたら、伝わってない女のせいってこと？伝えられなかった男ではなく？

男 そういう言い方されるとなあ。

女 クツション投げたりする時点で、男の負けでしょ。

男 勝ち負けの話じゃなくね？

女 出たってよってことは、この部屋、もともとナナの部屋だったのかな？

男 そこに転がり込んだ感じ？

女 ああ、かもね。今のところそういう可能性はある。

男 ここ直してほしい…って、言えるのすごいよね。

女 それは思った。勇気あるよな。

男 うん。自分は完璧に出来てると思ってるのかな。

女 いや、そうじゃないんじゃない。もしかしたらナナもケンジロウには言ってるかも。

男 お互いに言い合ってる。

女 あー、まあ、そっか。

などと、男女は見解をやりとりしている。

そこにトモミ現れる。

女 ねえ、トモミ。

トモミ ん？

女 トモミは？どう思う？

トモミ 私はね、止めた方が良いと思う。

女 え？何が？

トモミ ごめん、何？

女 なにそれ、適当言わないでよ。だから、このさ。

トモミもやりとりに加わっていく。

ユカリ、スマートフォンを持って、駆け込んでくる。
椅子に落ちつきなく座ると、スマートフォンを遠ざけたり近づけたり、
手から離したりしている。そこへ、例の女性が現れる。

女性 早く、返事すれば？

ユカリ 出来ないよ。

女性 どうせ、するんだから。しないかどうかを悩んでないでしょ？

ユカリ 悩んでる。

女性 嘘。どういう文面にするか、じゃない。どうでもいいよ、そんなの。

ユカリ そんなことないでしょ、大事だよ、文面。

女性 いいんだって。私も、会いたいです。で。

ユカリ 違う！

女性 違う？

ユカリ ……違う。

女性 言わせたくせに。

ユカリ そんなつもりは。

女性 なんでもいいけどさ。久しぶりに会うだけだよ。

お酒飲んで、ご飯食べて、それだけ。

それ以上はないよ。だって。

ユカリ 結婚してるって。

女性 すぐ子供をかわいがってるし。

ユカリ 奥さんのことも愛してる。

女性 大学の同級生だってね。

ユカリ 綺麗な人。

女性 しあわせそう。

ユカリ そう見える。

女性 でも、会いたいわって。言ってきた。

ユカリ 久しぶりに会いたいねって、言ってるだけ。そこに深い意味は無い。

もう10年以上、会ってないから。

女性 ……。

ユカリ だから、それだけ。お酒飲んで、ご飯食べて。それだけ。

女性 じゃ、早く返事しよう。彼の気が変わらないうちに。

ユカリ 私の気が変わらないうちに。

二人 私も、会いたいです。

ユカリ、送信する。二人は目を合わせて。

部屋の奥に去るユカリを女性は見つめている。心なしか、微笑んだようにも見える。去ったのを見届けてから女性も去る。

ユカリ インターネットの向こう側で彼を見かけた時から、石の範囲は拡がらなくなった。小指から徐々に拡大していった石化は、今では左手を首を越えるところまで、来ている。ああ、このまま、肘や、肩まで伸びて、死んでしまふんだと思っていて、原因は勿論分からない。ただ、問題は私の心にあるのだろうということぐらいは、見当が付く。もし、彼を見かけたことで石化の進行が止まったとしたなら、会うことが、石化を解消することに、繋がるかも知れない。だから、私は会いたいのだと、連絡をした。

ユカリ 明日。彼は、急だけど、と前置きしてきた。

待ち合わせ場所は、地元の駅前。ここから4駅ほど行ったところ。

不思議と、あれだけ恐怖を感じていた外の世界が、なんでもないもののように思えた。

大丈夫。私は大丈夫。心の中で何度も唱えた。

部屋のチャイムが鳴る。二度目が鳴り、振り返る。

ユカリ え？

もう一度、チャイムが鳴る。

男の声 ユカリー。

ユカリ ……。

男の声 いるんだろ、おい。

ユカリ ……。

男の声 謝るから。俺が悪かったよ。

ユカリ え、嘘でしょ……。

ユカリ、玄関の方へ行く。

少しして、一人で戻ってくるユカリ。

ユカリ 玄関の前でうなだれていたのは、もう何日も前に出たきり、一度も連絡をしてこなかった、男だった。……今の、彼氏。一応まだ、別れていない。

ユカリ 自分の頭をよぎった言葉に、驚く。……別れる気だったんだろうか。もう私の心は、インターネットの向こうの彼の方を向いているのだろうか？……私はとりあえず彼を家に上げた。ひどくうなだれていて、元氣のない彼を見るのは初めてだった。スマートフォンは電池切れで連絡が取れなかったと説明した。今時、充電する方法なんていくらでもあるはずだけど、敢えてそれを追求することはしなかった。今までどこに居たのかも、聞かない。とりあえず今、シャワーを浴びている。なんだか、私がしていることがバレている様な気がして、落ち着かなかった。

ユカリ 自分の気持ちがわかんない。左手より先に頭はとつくに石になってるのかも。

女性、姿を現す。

女性 ごめん、許してくれ、って言われたらどうする？

ユカリ わかんないよ。

女性 俺が悪かった、努力するから。これから。

ユカリ わかんない。

女性 何が分からない？徹底的に話し合おう？歩み寄ろう。

ユカリ 私の気持ちはどこへ行くの？

女性 あの時の、私の怒りは。傷つけられた心は。どうなるの？

無かったことになるだけで、傷つかなかったことにはならない。

ユカリ でもそうするしかないよ。時間が経つのを待つしか無い。待てるように、謝るんだから。

女性 それは、本質的な解決にはならないでしょ。

ユカリ じゃあ、どうしたらいいの。

女性 それがわかってたら、もうとつくに言ってるよ。

ユカリ ……。

女性 黙ってても、仕方ないのにね。

ユカリ 言葉を幾ら交わしても、同じでしょ。

女性 ……。

ユカリ 自分の中で答えの出ていない物を、人と話したところで、

答えなんかでるはずがない。シャワーを浴び、着替えた彼は、やはり、

謝罪と、和解と、歩み寄りを主張してきたが、私は受け入れられなかった。

黙りこくる私を、彼は抱きしめてきた。

私は、されるがまま。心は、泣いていた。

もしかしたら、実際、涙も流れていたかもしれない。

音楽が鳴り、誰もいなくなる。音楽はシャワーの音へと変わる。

ユカリ、あらわれる。

ユカリ 私たちは順番にシャワーを浴びた。こんな短い時間の間に、

あいつは二度目のシャワーだ。これは一体、何の儀式だろうと考える。

一週間一人で眠ったベッドに押し倒され、タバコの臭いのするキス。

全身を這い回る手の感触は、以前より私を高揚させなかった。

ユカリ むしろ、今まで感じたことのない気持ちになった。

不快だ、と思ったのかも知れない。気持ちの伴わない接触は、

こんなにも冷たく、辛いものなのだと思った。

彼は、久しぶりだと喜び、仲直り出来て嬉しいといつもより興奮気味で、

好きだ、愛してる、などと耳元でささやき続けた。

ユカリ 呪いだ。と思った。私は今、呪われている。進行形で、

全身を呪われていると感じた。心も、蝕まれている。

久しぶりだと言った彼のスマートフォンには、頻繁に他の女とのやりとりの

記録が残っている。あくまで、私とするのが久しぶりな、だけだ。

ユカリ 彼からすれば、私は、彼を受け入れた存在ということになるのだろうか。

また、居座ることになるのだろうか。今日は、あのベッドで眠るのだろうか？

そんな未来は想像できない。私は、インターネットの向こうの彼に、

会うつもりでいたんだ。明日、私は出かけるんだ。

ユカリ ふと、私は左手が重たくなっていることに気が付いた。

おそるおそる触れて見ると、肘を越えた所まで、私の左手は石になっていた。

そこに、彼がシャワーを終えて出てきた。そして彼の口から出た言葉は、

私を突き落とした。

彼氏 明日、誰と会うの？

ユカリ 私は、すこし黙ったまま、動かせる右手で、必要最低限の荷物を持って、

部屋を飛び出した。彼の腕を振りほどき、私は走った。右腕だけを懸命にふって。

1時間もすれば彼からの連絡も落ち着いた。その間ずっと私は進み続けた。

走り続ける体力なんてない。ただただ、前へ、前へ。止まった瞬間に、

部屋に連れ戻されると思ったから。

ユカリ 上手くいかないことばかり。石になった方が楽かもしれない。

前沢、缶飲料を二つ持って現れる。一つをユカリに私ながら。

前沢 こっちでいいですか。

ユカリ あ、うん。ありがとう。ごめん、あけてくれる？

前沢 ?はい。……どうぞ。

ユカリ ありがとう。……久しぶり。

前沢 ですね。

ユカリ ごめんね、突然。

前沢 いや、大丈夫です。

ユカリ 結構多いの？

前沢 あ、多いっすよ。一週間に一回は。

ユカリ それ多いの？

前沢 多いっすねえ。

ユカリ 前沢くんも参加すればいいのに。

前沢 いや、俺は、部外者ですから。

ユカリ そういふもんかね。

前沢 飲み会も、仕事の内、だそうですよ。

ユカリ それあれじゃないの、アルハラ。

前沢 まー、あんまり話聞かないんでわかんないですけど。

でも、自分的にも、帰るの待ってる方が楽っていうか。

ユカリ 自由だしね。その間。

前沢 まあ。

二人、同時に飲む。

前沢 喧嘩っすか？彼氏さんと。

ユカリ あれ、トモミから聞いてない？

前沢 特に……。

ユカリ そっか。まあ、上手くいってなくてさ。

前沢 ユカリ先輩も同棲でしたっけ。

ユカリ 懐かしい、そう呼ばれるの。

前沢 ……。

ユカリ 同棲しようって言って、始めてないけどね。なんか、いつの間にか。

前沢 へえ……。

ユカリ 親とかうるさそうで。
前沢 まじすか？
ユカリ うーん、想像だけど。彼氏の話とか今までもしたことないし。
前沢 へー。
ユカリ あ、そうだ。ねえ。
前沢 はい。
ユカリ 前沢くんは読んだ？先輩の。
前沢 あ、脚本ですか？読みましたよ。
ユカリ どうだった？
前沢 あれ。トモちゃん、ユカリ先輩にも送ったって。
ユカリ あ、貰った。貰った。
前沢 読んでないんすか。
ユカリ ちょっと、余裕無くて。
前沢 面白かったですよ。流石だなあって。思いました。
ユカリ ふうん。トモちゃんも、そうやって言ってた。
前沢 あ、すみません。
ユカリ 謝ることなくない。
前沢 ユカリ先輩、卒業して、どうしてたんすか。
ユカリ え？
前沢 ほら、俺は就職して、働いてるじゃないすか。ちっちゃなホームセンターの、社員ですけど。
ユカリ うん。
前沢 トモミ先輩は——
ユカリ いいよ、別に。
前沢 ……劇団で、脚本書いてて、好きなことに夢中になってて。
ユカリ うん。
前沢 他の先輩とか、同期も、まあ中には連絡取ってないヤツも居ますけど、就職したり、結婚したり、実家継いだりしてるわけで。
ユカリ うん。
前沢 ユカリ先輩だけ、知らないんすよ。誰も。
ユカリ トモミに聞いたら？
前沢 なんか、聞いちゃいけないのかなって。
ユカリ そんなことないよ。……私は、なにもしてないだけ。
前沢 なにも？
ユカリ うん。なんにも。
前沢 バイトも？

ユカリ そうだよ。

前沢 そんなこと、あるんすか。

ユカリ いや、今はね。ついこの間まで、働いてたよ。

最近ね、やめちゃって。

前沢 そう、なんすね。

ユカリ うん。……ごちそうさま。

前沢 あ、はい。

ユカリ じゃ、私そろそろ。ありがとね。

前沢 どこ、いくんすか。

ユカリ ……帰るよ。

前沢 どこに……。

ユカリ ー、私の家。

前沢 え？だ、だい、大丈夫ですか？

ユカリ 勿論。ありがとね。

本を持った男、現れる。

男 女は作り笑顔でそう言うと、携帯電話を耳にあてながら、歩き始めた。

またね。と、共にした男に告げ、夜の国道に行く。

残された男は、コンビニの駐車場から、小さくなる背中を見つめるしかなかった。

ひとりにしてくれ、と、言われている気がしたからだ。

夏の夜は十分蒸し暑い。30分も歩けば、汗も出る。

彼女は、全身で涙を流す様にして、自分の部屋の方へと歩を進めるしかなかった。

心と体が、はがされる感覚。お酒を買って貰えばよかったと後悔した。

シラフでいたくない。鳴っていない携帯電話をカバンに突っ込むと、彼女は走った。

湿度の高い空気がまとわりつく。それでも、もう止まらない。

夜が終われば。明日が来れば、私は生まれ変わる。

根柢の全くない仮説だけが、彼女の足を進めていた。

劇団の飲み会の席。トモミと先輩劇団員。

トモミ どうっすか。

男 そう言われてもなあ。

トモミ え、面白い？

男 とりあえずここまでは一気に読めたけど。

トモミ つてことは、面白い？

男 うーん。まあ、安直だけど、それでいいなら？
トモミ えー、なにそれ！
男 なんで小説なんだよ。もう脚本書くの嫌なのか？
トモミ いや、そうじゃなくて、それぞれ適した表現っていうのがあると思うんですよ。メディアミックスを否定するわけでは無いですけど、演劇には演劇、ドラマにはドラマ、アニメにはアニメ。それぞれ得意とする表現があると
思うんですよ。ほら、たまに、漫画でやってくれ、って演劇、あるじゃないですか。
男 あー、うん、まあね。
トモミ そういうことですよ。私が今、書きたいことが一番適している表現方法は、
小説だ、と私は睨んでいるんです、今。
男 なるほどねえ……。
トモミ だから、申し訳ないですけど、次の舞台の脚本は私、書けません。
こっちに、集中したいので。
男 そういう話かよ……。
トモミ です。
男 いや、変だと思ったんだ。突然、話があるなんて、真面目な顔して言うからさ。
万が一にも、告白じゃねえだろうなどは思ったけど。
トモミ いやいや、そんなの、ありえませんか。あっはっはっはっは。
男 笑いすぎだろ。
トモミ すみません、なんか、意味深な言い回しで。
男 まいったな、じゃあ、どうすつか。
トモミ あの……もしよかったら……
男 ん？
トモミ この間、稽古の時に皆で読んだ……
男 あの、お前の先輩が書いたってやつか？
トモミ あ、はい。
男 お前だろ？あれを上演するのに反対してたのは。
トモミ そうなんですけど……。いや、多分、面白くなると思います。
面白く、なりすぎちゃうくらいじゃないかなー、なんて。
男 どういうことだよ。
トモミ だから、別に、もう反対はしません。なので、そのセンで検討してもらおうことは、
できますか？
男 ……ま、お前がいいんだったら、多分いけるんじゃないかな。
トモミ ありがとうございます！
男 でも、本当にいいんだな？
トモミ ……はい。

明け方。部屋に戻ってきたユカリ。中に彼氏の姿はなく、代わりに女性が一人、座っている。

ユカリ ……。ただいま。

女性 いないよ。

ユカリ ふうん……。

女性 お風呂行ってきたら？汗かいたでしょ。

ユカリ うん。

女性 すぐ寝るのは、おすすめしないけど。

ユカリ 捨てる。

女性 捨てる？

ユカリ うん、そのベッド。捨てる。

女性 そこまでしなくても。

ユカリ もう、私はそこで眠れない。

女性 今はね。

ユカリ うるさい。

ユカリ 部屋はいつも通り。気が抜けた。だけど、ベッドはもう、使えない。

ユカリ、居なくなる。

女性 明け方の部屋は、とてもまぶしかった。昨日の残り香は思ったより無く、

ああ、紛れもない私の空間だと安心できた。けれどそれは、あの男の存在が、私にとって不自然なものではない、ということの裏付けなのかもしれない、とも思った。シャワーを浴びてもそれは流れることは無かった。

ユカリ 彼との待ち合わせは13時前。12時の電車に乗れば間に合う。

シャワーを浴びたら、どつと眠気が押し寄せた。ベッドで眠る気にはならないし、眠れないと思いたかったから、意地でもカーペットで、クッションを枕に眠ることにした。

女性、ユカリ、去る。入れ替わりで学生服の男女が現れる。

女 うわあ……すごいね。

男 うん。

女　こんな綺麗に咲くんだね。
男　そうだね。
女　全然思っていないじゃん。
男　思ってるよ。なんか、見とれちゃって。だってこれ一本でしょ。
女　うん、見とれちゃうね。

二人、桜の木を見上げて、黙っている。

女　ね。
男　ん？
女　毎年、見に来ようよ。
男　桜？
女　うん。
男　いいよ。
女　この桜の木。
男　これでいいの？向こうの桜並木がメインだよ？
女　うん、この木がいい。
男　……いいけど、向こうも行こうね？
女　それは、もちろん。
男　じゃあ、かわんないじゃん。
女　違うよ、この桜も必ず見によろうね、ってこと。
男　ああ、そういうことね。
女　そういうこと。……毎年、観に来るからねー（桜の木に）
男　なにやってんの。
女　桜にも約束してるの。
男　なにそれ。

男、言いながら、去る。
女、手を伸ばすが、届かず、一人になる。
桜の木を一人で見上げ直して。

女　私は、毎年来るよ。約束したから。毎年来る。
きつと忘れられない、約束だから。

アラームの音がして、女、去る。ユカリ、ゆっくりと出てくる。
スマートフォンを操作してアラームを止める。身支度を整えて、再び出てくる。

ユカリ よし。じゃ、行ってきます。

女性 ほんとに、行くの。

ユカリ うん。決めたから。

女性 後悔しない？

ユカリ 後悔しないことが、良い生き方ってわけじゃないでしょ。

女性 随分、強気だね。

ユカリ 行ってきます。

ユカリ、去る。

電車の音。

男女が座っている。男、女の肩で眠っている。

ユカリ、入ってくる。向かい側の席に座る。

しばらく電車に揺られる。

少しずつ、ユカリ、対面に座る女性が気になり出す。

やがてじっと見るようになる。

時が止まったかのようになる。

ユカリ 彼女の眼を見たときに、思わず見入ってしまった。

どこを見るわけでもない、その眼は、しかしどこかをしっかりと見つめて。

何を思うわけでもない表情で、しかし間違いなく何かを強く感じている。

名前も知らない彼女の。肩に、彼氏の頭を乗せた彼女の。

幸せみたいな形をした彼女でさえ、こんな表情をするんだ。

こんな気持ちを抱えて、さらけ出すんだ。

しかし、これだけではなかった。驚きだけではなく、もう一つ。

既視感を感じていた。

なんだ……どこだ……。誰だ。この顔を私は知っている。

この眼を私は知っている。この気持ちを、私は知っている。

……。

電車の音、大きくなり、そして聞こえなくなる。

ユカリ 私だ。朝、洗面台で見た私の顔だ。私の眼だ。ああ、

眼の前に座っているのは、私だ。私は今、こんな気持ちで、生きているんだ。

まるでもう生きていないような。意味を求めていないような。

負けてしまったような顔で、私は生きている。今、電車に乗っている。

電車の音、大きくなり、全てを包み込む。
そして遠ざかる。

ユカリ 気が付くと、待ち合わせの駅よりも手前の駅で、電車を降りてしまった。
近所の駅だけれど、なじみのないホームに一人たたずみ、私は、あてもなく
改札を出た。左手がなんだか重たくなった気がする。
引きずるようにして、駅から遠ざかった。

ユカリ ひどく、喉が乾いた。だけれど、身体が上手く言うことを聞かない。
頭を強く揺さぶられているように、視界が定まらない。
なんとか、公園のベンチに腰掛けることが出来た。
カバンからお茶を取り出してなんとか一口飲む。

ユカリ 木陰は随分涼しく、日差しの下に戻るのを、ためらわせた。
左手だけでなく、両足も石になってしまったような重さで、
当分立ち上がれなさそうだったから、困ることもなかった。
あの眼から逃げるようにしてここまで来た。
駅からかなりの距離をとって、やっとおちついてきたようだった。

トモミ ……ユカリ？

ユカリ 声の方を見ると、見知った顔が合った。
一瞬、他人のフリをすることもよぎったが、すぐに観念することにした。
出来すぎたドラマのようだ。

トモミ なにしてんの、こんなところで。

ユカリ トモミこそ。

トモミ 外、出られないんじゃないの。

ユカリ 出てみた。頑張った。

トモミ ……随分、気合い入ってんね。

ユカリ そう？たいしたこと無いでしょ。

トモミ たいしたことなくないでしょ。仲直りしたの？

ユカリ ーん。一度帰ってきたけど、また出てみたい。

トモミ なによそれ。どうすんの。

ユカリ わかんないよ。

トモミ でもそれじゃあ……。

ユカリ トモミは一度止まってから、ゆっくり私の顔を見た。

あ、しまった、バレた。と思ったが、なるべく顔に出さず、とぼけてみようと試みる。観念したつもりだったが、みつともなくあがいてしまうのは、なんだろう。性格だろうか。しかし、ごめんなさいと謝るのも、なんだか違う気がして出来なかったのだ。

トモミ なにとぼけてんのよ。あんた、会うつもりだったんでしょ。

ユカリ ごめんなさい。

トモミ ……はあ。

ユカリ しかしあっさり謝ってしまう自分の意志の弱さに呆れてしまう。

私はそのあと、コトのあらましを話す羽目になった。

たまたま、インターネットの向こう側に彼を発見したこと。

電話で相談したときには、実はもう約束をとりつけていたこと。

昨日の夜、戻って来た彼氏とコトに及んだけれど全く盛り上がりならず、

しかもお互いにお互いのスマートフォンを見ていたことが発覚し（私だけ）

反射的に部屋を飛び出したこと。

その後、行く当てもなく、どういうわけか、前沢さんに連絡し、

話を聞いて貰ったこと（どうやらなんとなくそんな気配を察していたらしい）

明け方に部屋に戻ると、もういなくなっていたこと。

ユカリ トモミは全部聞くと、小さなためいきをついた。

なぜ、自分に連絡をしなかったのかと指摘され、

私を一人にした前沢くんを叱るということを聞かされた。

私が一人にしてほしいと言ったからだと弁明したが、

それは却下された。ごめん、前沢くん。

トモミ それで？ここで待ち合わせなの？

ユカリ ううん。あと二駅ぐらい先。

トモミ なにしてんの、こんなところで。

ユカリ なんか、具合悪くなっちゃって。

トモミ え、熱中症とか。

ユカリ ううん……。原因はなんとなくわかってるの。

トモミ あ、左手……？

ユカリ あ、いや、そうじゃない。

トモミ なによ、どうしたの。

ユカリ なんていったらいいのかな……。その電車の中にね。

トモミ うん。
ユカリ 私が、居たの。

間。

トモミ そりゃそうでしょ、乗ってたんだから。

ユカリ そうじゃなくて。もう一人。私が。

トモミ ……。なに？

ユカリ いや、違うの。私じゃない。私じゃないんだけど、私、だったの。

トモミ 頭とか、ぶつけた？

ユカリ ごめん、なんて言って良いかわかんないんだ。でもそういうしかないの。

正面に座ってた女の人がね、私と同じ顔。いや、違う、違う顔なんだけど、同じ顔してたの。それで、ああ、私もこんな顔してるのか、って思ってたなら、ここに、いたの。

トモミ ……それは、怖い話？

ユカリ 個人的には、怖い話。

トモミ そう……。

ユカリ わかんない、よね。

トモミ ……うん。わかんない。

ユカリ どうしよう……。

トモミ デート？

ユカリ デートじゃないよ、会うだけ。

トモミ デートでしょ。そんだけオシヤレしてれば。

ユカリ ……連絡来てるかも。

トモミ ……。

ユカリ、スマホを取り出す。

ユカリ 見て。

トモミ ？

トモミ、促され、画面を見る。

トモミ やっぱり会えません。なにそれ。

二人、顔を見合わせる。

場所は変わって、トモミの所属する劇団の稽古場。
数名が、稽古の準備をしている。トモミがユカリをつれて入ってくる。

トモミ おはようございます。

団員A おはようございます。

ユカリ お、おはようございます……す。

団員A あ、そちらが、見学の。

トモミ そう。私の大学の時の友達。

ユカリ よ、よろしくお願ひします。

団員達 よろしくお願ひします。

トモミ じゃ、その辺座ってて。

ユカリ ねえ、やっぱり私帰るよ。

トモミ 何言ってるのいまさら。大丈夫だよ。私着替えてくるから。

ユカリ う、うん。

ユカリ、促され椅子に座る。トモミは更衣室へ。

他の団員達も準備に戻る。

そこへ、遅れて先輩が入ってくる。

先輩 おはようございます。

団員達 おはようございます。

先輩 ……え、あれ？

ユカリ あ、え、え、っと、け、見学に来ました、あの……あれ？

先輩 ユカリ、だよね？

ユカリ 先輩、ですよね？

先輩 なにしてんの。あ、トモミ？

ユカリ あ、はい、そうです。さっきたまたま会って。

先輩 そうなんだ。いや、実はさ、俺最近――

ユカリ あ、入団、したんですよ、ここに。

先輩 ……そう。よく知ってるね。

ユカリ トモミから……。

先輩 あ、そっか、そうだよな、そうだよ。そうだ、実はさ

ユカリ 今度の演目……ですか。

先輩 そう。俺が書いたヤツ……なの。

ユカリ すみません。

先輩 いや、気にすんなよ、そりゃそうだよ、話してるよ、なあ。

ユカリ ……。

先輩 いや……ほんと……久しぶり……。

ユカリ ですね。

先輩 その……あのさ……

ユカリ はい。

先輩 ごめんな。

ユカリ え？

先輩 怒ってるよな、あの時のこと。トモミにも、久しぶりに会った時、めちゃくちゃ怒られたもん。同じだよな。

ユカリ なん、ですか？

先輩 ほら……最後の絵本作りの時さ。

ユカリ ああ……。

先輩 ああ……。

ユカリ 別に、もう怒ってないですよ。流石に。

先輩 本当？

ユカリ 何年経ったと思ってるんですか。それにこうして、トモミは、才能を開花させることにもなったわけだし。

先輩 まあ、そうだよな、びっくりだよ。

ユカリ ほんと、凄いですよね。

先輩 ユカリは？

ユカリ え？

先輩 いま、なにしてるの？

ユカリ いや、私は別に……

トモミ、着替えて出てくる。

トモミ お待たせー。あ、先輩おはようございます。

先輩 いや、ここではトモミのが先輩だろ。

トモミ じゃあ敬語使ってくださいーい。

先輩 はい、かしこまりました。

トモミ よろしい。じゃ、はじめますか。

トモミの声を聞いて団員達が集まってくる。

ユカリ 予定が無くなった私は、その日の劇団の練習に最後まで付き合った。

終わった後、飲み会にも誘われたが丁重にお断りして、一人で帰った。

ユカリ　なんとなく、電車に乗る気分にはならず、歩いて帰った。

夜になっても蒸し暑い。嫌な季節だ。途中コンビニで弁当と缶チューハイを買う。稽古の様子を思い出しながら帰った。ユカリや先輩、劇団員の人たちが、狭い部屋で、必死になって、覚えたセリフを叫んでいた。

先輩の台本を上演するらしい。なんとなく懐かしさを感じる世界だった。

ユカリ　……生きてたなあ。

ユカリ　なんとなく、口から零れた。いや、私だって生きてるし。生きてるけど。

部屋に帰ると、とんでもない熱気が迎えてくれた。よかった、一人だ。

女性　おかえり。

ユカリ　ただいま。

女性　まさか、帰ってくるとは。

ユカリ　どういう意味よ。

女性　お持ち帰りコースかなーって。

ユカリ　はあ？なにそれ。結局、会えなくなったの。

女性　電車を降りたから？

ユカリ　違う。なんか、仕事か急用か。

女性　怖じ気づいたか。

ユカリ　なにそれなんでよ。

女性　残念？

ユカリ　さあ。

女性　安心してる？

ユカリ　別に。

女性　あんたはさ。

ユカリ　ん？

女性　何のタメに生きてんの？

ユカリ　……え？

女性　何か目標や夢があるわけでもなくさ。周りの男に振り回されて、

友達や先輩をぼーっと見てるだけでさ。

ユカリ　うっさいな。傷つくために生きてんだよ。悪いか。

女性　悪いでしょ。

ユカリ　ほっといて。

女性　ほっとけないよ。

ユカリ　なに、ただでさえ暑苦しいんだから。

ユカリ、抱きつかれる。

ユカリ ちょっと。

女性 ひとりじゃないって。

ユカリ はあ？なにそれ。

一層、強く抱きしめられる。

ユカリ なんなのよ……。

スマホが鳴る。

ユカリ ねえ、ちょっと。

ユカリ、払いのけて、スマホを取る。

ユカリ ん？……。なにこれ。ねえ。

女性ものぞき込む。

ユカリ こういうこと？ひとりじゃないって。

女性 ……さあ。

ユカリ なんなのよ。

ユカリ 私がこっそりやっているSNSに、ダイレクトメッセージが届いた。

相手は知らない人。インターネットは匿名のまま、人をつなげてしまう。

そこには、こう書かれていた。

「私も、左手が石になりました」

音楽。転換。

図書館。休憩スペース。狭い空間だが、おしゃべりの許された空間。
 (奥には自動販売機が何台か並んでいる。
 学生服の男女。)

女 (小さな声で) お待たせ。

男 あ、うん。

女 帰る？

男 ちょっと、待って。

女 何読んでんの？

男 (本の表紙を見せる)

女 へー、やっつとやる気になった？

男 たまたまあつたから。

女 ふうん。

男 何のタメに勉強すんだろうなーって。

女 なにそれ。

男 何のタメ？

女 わかんないけど、皆してるし。

男 ノらないんだよねえ。

女 したくないだけでしょ。

男 そう言われたら、そこまですわ。

女 え？

男、立ち上がって。

男 それくらいのこと、わかってんだよなあ。

女 自分のためでしょー？

男 もつとあるんじゃないかと思うのは、逃げかなあ。

女 例えば？

男 それは……わからん。帰ろー。

女 なにそれー。

二人、歩いて帰っていく。

ユカリ その後、彼は、普通に大学を受験し、合格した。

私は落ちた。

ユカリが浮かない顔して現れる。女性が驚く。

女性 生きてる？

ユカリ どう見える？

女性 んー、死にいきそう。

ユカリ なにそれ。

女性 ゾンビっぼい。

ユカリ 離れないんだよ。

女性 なに？

ユカリ 離れないんだよね、昨日のあの眼が。

女性 眼。

ユカリ 電車の！中のさあ！

女性 暴れない暴れない。

ユカリ 頭おかしくなりそお……。

女性 左手だけで充分だっつーのにね。

ユカリ ……（恨めしげにみる）

女性 （左手をひらひらさせながら）なんか飲んだら？冷たいの。

ユカリ いらない。

女性 うそお。

ユカリ いらなああいいい。

女性 随分、ヤラれてるね。

ユカリ 夢に出てきた。

女性 あの、女の人？

ユカリ そう。壁中いっぼいの、眼。眼。眼。め。

女性 うあ。

ユカリ 床にも、天井にも。瞼の裏にも！

女性 ちよっと何それ、大丈夫？

ユカリ 恋かも。

女性 はあ？

ユカリ だったらよかったのに。

女性 ……。

ユカリ もう何も考えられない。

女性 どうすんの、あっちは。

ユカリ 余計考えらんないよお……。

女性 ま、それもそうか……。

ユカリ なんとかしてよお。

女性 無理でしょ。

ユカリ わかっているよお……。

スマートフォンが鳴る。

女性 ほら、お呼びだよ。

ユカリ ううう……。

ユカリ、渋々スマートフォンを手に取る。

スマホ お返事ありがとうございます。私も一人で苦しんでいたので、

同じ境遇の人に出会えて嬉しいです。

ユカリ 出会えてって、別に直接会ってもないのに

スマホ もしよろしければ、一度直接お会いしていろいろお話してみたいのですが

ユカリ 何をいろいろお話するの……

スマホ ご都合のいい日付はありますか？

ユカリ いや、どこに住んでるかもわかんないのに……

女性 同じ県内に住んでるっぼいね。

ユカリ え？

女性 プロフィールに書いてある。

ユカリ ……そう。

スマホ 私、この日とこの日は予定があるんですけど、こっちの日だったら、一日空いているので、最寄りの駅まで行くことも出来ます。

そういえば、この駅の近くに出来たカフェ、一度行ってみたいと思っていたんですよ。もしよければ、いかがですか？

ユカリ えらく明るく前向きなまぶしいメッセージだった。

同じ境遇の人とやらを見つけて、舞い上がっているのかもしれない。

こちらら同担拒否である。

女性 それ意味違うよ。

ユカリ 分かっているよ。

女性 あ、そ。

ユカリ こっちが返事をする間もなく、連続でメッセージ来るんだよね。まだ会うとも決めてないのに。

女性 え、でも。

ユカリ なに？

スマホ じゃあ、この日に、ここのカフェで、この時間に。楽しみにしています。

ユカリ はあ？

女性 決まってるけど。

ユカリ なんだこれ……。大体、私と会うことが何になるのだろう。同じ、呪いにかけられた物同士、慰めあうんだろうか。それに、何の意味があるのだろう。

女性 会うつもり、だね。完全に。

ユカリ ……いやだなあ。

女性 別にいいんじゃない、向こうが勝手に取り付けた約束だし。守らなくても。

ユカリ 変な風に恨まれたりでもしたらどうすんの。

女性 ……殺されるかもね。

ユカリ やめてよ。

女性 会ってみれば。どうせすることもないんだし。

ユカリ ……そんな言い方しなくたって。

女性 事実でしょ。

ユカリ そうだけど！

チャイムが鳴る。二人、顔を見合わせて。

ユカリ いませーん。

女性 彼氏かな。

ユカリ 無いでしょ。

女性 そう？

もう一度チャイムが鳴る。

ユカリ しつこいな。

スマホも鳴る。

ユカリ あ。……（取って）もしもし。

トモミ 今いないの？

ユカリ え？

トモミ 部屋。

ユカリ あ、なに、トモミ？

トモミ うん。

ユカリ、言いながら、玄関へと向かう。

ユカリ ごめんごめん。

トモミ なんだよー。

ユカリ 一人暮らしの鉄則でしょ。

トモミ 一人暮らしして。

ユカリ だってそうでもない。どうぞ。

トモミ お邪魔しまーす。

言いながら、戻ってくる。

トモミ ごめんね、早くに。

ユカリ いや、いいけど。どしたの。

トモミ 昨日は、あの後真っ直ぐ帰ったの？

ユカリ あ、うん。ごめんね、折角誘ってくれたのに。

トモミ また今度、行こうね。

ユカリ うん。

トモミ あれから……連絡あった？

ユカリ ああ……無いよ。

トモミ ほんとに？

ユカリ うん。

トモミ どうすんの、もう一回会おうって、言われたら。

ユカリ んー、どうするかなあ。

トモミ 会わない方がいいって。絶対。

ユカリ それは、それくらい、わかってるよ。

トモミ でも、会おうとしたじゃん。

ユカリ そうだけど……。

トモミ 心配してんだよ、私は。余計なお世話だろうけどさ。

ユカリ トモミ……。

トモミ そのせいで、なんか、病気みたいになってんでしょ？

ユカリ 病気……。

トモミ 違うの？その左手。

ユカリ ……。

トモミ 心配するでしょ。

ユカリ うん。ありがと。

トモミ ユカリ。

ユカリ うん？

トモミ うんじゃないよ。全然聞いてないじゃん、人の話。

ユカリ 聞いている聞いている。

トモミ 聞いているだけじゃん。

ユカリ 難しいこと言うなあ。

トモミ 会うじゃん。連絡あったら。

ユカリ ……多分。

トモミ なんですよ。

ユカリ トモミはさ。

トモミ ……ん？

ユカリ トモミにはさ、わかんないよ。

トモミ なに。

ユカリ なにかに、なれる気がするじゃん。

トモミ なにか？

ユカリ そう。私、今、なんにもないから。仕事もしてないし、

勉強してるわけでもないし。じゃあなにかやりたいことがあるかっていうと、

そうでもないし。彼氏もいなくなりそうだし。

トモミ ユカリ。

ユカリ でも、会えばさ、私になにかになれるかもって、思ったんだよ。

ううん、何か、変わるかもしれないなって思ったの。

この、腐りかけの毎日がさ、少し、良い方向に行くかもしれないって。

トモミ ……。

ユカリ 病気もさ、良くなるかもしれないって。思ったんだもん。

トモミ ごめん、なんか、変なこと言ったね。

ユカリ 違う。違うんだよ。謝って欲しいわけじゃないの……うるさい黙って！

トモミ ……。

ユカリ 電車の中で

トモミ ん？

ユカリ 電車の中で私に出会ったって言ったでしょ。

トモミ うん。

ユカリ 今朝から、その眼が、離れないんだよ。頭の中で。ぐるぐるぐるぐる。

左腕もどンドン重たくなる。冷たくなってる。ねえ、もしかしたら。

トモミ なに？

ユカリ 私、このまま死ぬのかもしれない。

ユカリ なんて。

ユカリはいつの間にかひとりぼっちだった。

ユカリ 思いのままを打ち明けて、それをトモちゃんが聞いてくれる。

これを選択できたなら、いくらかマシだったのかもしれないけれど、そんなことが出来るなら、国語の時間の音読だってもっとマシだったはずだ。

ドモルしかない私は、自分の気持ちなんか殺して、ただ、「嫌だな」と思いながら、黙ることしか出来なかった。だから実際はこうじゃない。

トモミが根負けして帰る頃には、私は鼻水垂らして泣いていた。

あれだけ寝るのを拒んでいたベッドにあっさりと潜り込み、

どんなに嫌悪感を抱いていても、懐かしいと感じてしまう匂いをかぎながら、

優しい声をかけて、部屋を出ていくまで聞き耳を立てていた。

涙はとうに涸れている。ねえ、トモミ。

女性だけはそこにいた。

女性 私、もう死んでるのかもしれない。

ユカリ、声に反応して見る。女性もユカリを見ている。

女性 あおいとりはね。

ユカリ え？

女性 あおいとり。

ユカリ うん。なに。

女性 実はそこにいた。そういうわけじゃないんだよ。

ユカリ え？

女性 あおいとりなんかいなかった。

ユカリ ……。

女性 もとよりこの世に、あおいとりなんかいない。

ユカリ ……。

女性 ちがうな。

ユカリ ちがうの。

女性 うん。もとより私の、あなたの世に、あおいとりなんか、いない。

女性、去る。

ユカリ すぐに会いたいです。今日でも。いえ、せめて明日。いかがですか。

6.

女性が二人、現れる。

女1 みてこれ。

女2 あ。ペアリング？

女1 そー。

女2 小指なんだ。

女1 なんかほら、薬指だとき、下品じゃん。

女2 そーかな。

女1 って向こうが言うから。

女2 彼氏も小指につけてんの？

女1 んーん。

女2 え？

女1 首からさげてる。

女2 へー。いいじゃん。

女1 そっかな。なーんか嫌な感じよ。

女2 そうなの？

女1 そ。だから今これ、別にノロケじゃなくてね。

女2 うん。

女1 愚痴です。

女2 愚痴かい。

女1 一緒に、呪われてくんないのさ。

女2 なに？のろい。

女1 そー。一人で呪いにかかったの。私は。

呪いのピンキーリングよ。

女2 わからん、なに？

女1 それを外すと幸せになれない。

女2 外せは、するんだ。

女1 しかし、つけていて幸せかは、わからない。

女2 なんだ、それ。

女1 呪いの、ピンキーリング。

女1、ふらふらと歩き出す。

女2、後を追いかける。

ユカリの姿、現れる。

ユカリ 次の日。私は、あっさり待ち合わせの駅前にいた。

奇しくも、あの日、私が向かっていた駅。

そう、インターネットの向こう側の彼と再会を約束していた駅だった。

インターネットの向こう側は、つまりここなのかもしれない。

夏の日差しが容赦なく照りつけるアスファルトを見つめながら、

かろうじて日陰になっている場所に立ち、セミの声を聞いていた。

一人の女性、現れる。

女性 あのを。

ユカリ あ、は、はい。

女性 待ち合わせ、の方、ですか？

ユカリ あ、え、あ、は、はい。

女性 あ、お待たせしました。

ユカリ ど、どうも。

女性 どうも。ありがとうございます。まさか本当に会えるなんて思って無くて。

いや、嬉しいです。ありがとうございます。

ユカリ こ、こちらこそ……。

女性 ありがとうございます。

間。

ユカリ い、いきますか、そしたら。

女性 あ、そうですね。そうですね。いきましょう。

ユカリ 私たちは謎の沈黙を経て、歩き出した。駅からほど近く、イトインのある

パン屋さんがお目当てだ。美味しくてリーズナブルでオシャレでかわいい。

そしてパン。まぶしいくらいの存在だ。まさかこんな形で来ることになるとは。

ユカリ 私たちは一番端の席に座った。二つずつパンを買い、アイスコーヒーを頼んだ。

座ってアイスコーヒーを一口飲むと、すぐに彼女はしゃべり出した。

女性 あ、わたし、あの、マホと言います。

ユカリ あ、マ、マホさん。

女性 はい……。

ユカリ ユカリです……。

マホ あ、よ、よろしくお願いします。

ユカリ よろしくお願いします。

マホ ……。

ユカリ ……。

ユカリ イライラする。自分も必死だ。相手も必死なのだろう。でも、イライラする。なんだこの会話は。する気あるのか？いや、有るんだ。あるからこそなんだ。

マホ あ、あの

ユカリ はい。

マホ み、み、見せて貰って良いですか。

ユカリ え？

マホ ひ、ひだり、て。

ユカリ あ……。はい。

ユカリ、左手を差し出す。

マホ、ゆっくりと触る。

マホ し、しつ、しつれい、します。

マホ、ユカリの左手に触れていく。親指から順番に。

マホ あ、わ、わ。ここから、もう石、ですか。

ユカリ あ、はい。

マホ あれ、結構、すすんで、ます？

ユカリ あ、今は、肘くらいまでですね。

マホ え、じゃあここも。

ユカリ あ、はい。

マホ ここも？

ユカリ はい。

マホ ここは？

ユカリ そこは違います。

マホ あ、すみません、そうですよね、肘までですもんね、あ、すみません。

ユカリ 大丈夫です、大丈夫です。

マホ いつから、ですか。

ユカリ あ、いつからだろう……。

マホ あ、私は……。

ユカリ その後、彼女は、自分の話を始めた。いつ石になって、何故石になったか。どれくらいのも重さで、酷いときは、どこまで症状が進行し、友達や親に迷惑をかけ、病院にも行ったこと。それでもはつきりせず、自分が思う、原因と対処法。自分の傷の深さを、誇らしげに語った。それは、先ほどまでの会話からは想像出来ないほどの名調子で、私の耳には全然入ってこなかった。ただ、楽しそうに語る彼女を見つめていた。アイスコーヒーを飲んだら怒るだろうか。パンをかじったら気分を害するか。彼女のトレイをひっくり返したら、どんな顔をするんだろう。多分上手く作れていない笑顔で、私は頷きながら時間が過ぎるのを待っていた。

マホ あ、すみません、なんか私自分ばかりしゃべっちゃって。あでも、わかりますよね？

ユカリ え？

マホ わかりますよね？

ユカリ ……。

マホ ユカリさん？

ユカリ あ、はい。まあ。

マホ ……。

ユカリ ……。???

マホ よかったあ。嬉しいな、分かってくれる人に会えて。

ユカリ あはは。

マホ それで？

ユカリ え？

マホ それで、ユカリさんは？

ユカリ あ、えっと……。

マホ ……。

ユカリ 私は……。

ユカリ 私は、黙ってしまった。いざ、自分の話をしようとする、言葉が全く出てこない。この人に、何を話せば良いんだろう。この人に、話したくない。私の、苦しみや、私の思いを、どうして、今日初めてあったこの人に打ち明けないといけないんだろう。私はそれができなくて、苦しんできたんだ。

マホ 大丈夫。

ユカリ え？

マホ ゆっくりでいいですから。はき出すと、楽になりますよ。

ユカリ

背中でもさすりましようか、と言わんばかりの彼女の態度に、私はもう、どうしていいかわからなくなつた。そりゃあ、先にはき出した方はもう、

幾分か楽でしょうから、他人のことを慮る余裕もありましようが、

こちらとしては何故か崖っぷちの所を無理矢理歩け歩けと

言われているような気持ちでございますから、私はふらりと立ち上がると、

アイスコーヒーもそのままに、駅へ向かつて歩き出してしまったのでございます。

マホ あ、あの、ユカリさん？

ユカリ

歩き出すと、少し落ち着いてきた。だけれど入れ替わりで別の気持ちだが、私のこの辺りを支配してきた。なんだ。なんだ。今のはなんだったんだ。

そして、これはなんだ。

マホ あ、あのお……

ユカリ (マホの方へ向き直り) ……。

マホ ……あ、あの、私、私、なにか……

ユカリ 多分、違うんですよ。

マホ え？

ユカリ 私と、あなた、違うんですよ。おなじじゃない。

マホ い、いやでも、私もアナタも、ほら、石になつてるじゃないですか。

同じですよ。

ユカリ 違いますって！

マホ ……。

ユカリ 全然違いますから。私は……

病院にも行けないし、外にも出られなかったんです。

誰かに相談することもできなかったし……。私はあんなに楽しそうに、

自分の……自分の中のどろっとしたものをはき出したり出来ないですから。

い、い……いいい……。

ユカリ、泣き出すのをこらえて。

ユカリ 一緒にしないでよ。

波の音がする。辺りは薄暗い。
学生服姿の女、現れる。

女 ……。

女、たたずんだあと、左手の小指から、指輪を外し、見つめる。

女 ……。あっさりしてるな、意外と。

指輪を握りしめ、海を見据えて、腕を上げるか、投げられず、腕を下ろす。

女 これを捨てたからといって、なにか良いことがあるわけでもない。

手の中で転がしながら、呟く。

女 だけど、持っているの良いことは無いだろう、きつと。

もう一度、握りしめる。

女 あれだなあ、もったいないなあ。折角かわいいの、買ったのに。

もう一度、海を見て。ふいに、指輪を下投げで放る。

女 ちっほけだな。……大問題だ。

去る。途中で振り返り、もう一度、海を見る。

ふと、さっきまで指輪をはめていた指を眺めて。

女 楽になった気も、する。

女、去る。

溶暗。波の音だけが残る。

先ほどと違う場所、ユカリ一人で座っている。

ユカリ ……。 ……。

ユカリ、震える右手で左手を掴んでいる。息を落ち着かせようと必死の様子。

ユカリ ……ごめんなさい……。

ユカリ、震える声で呟き、泣きじゃくる。

少し時は戻り、ユカリとマホが対峙している。

マホ 一緒にしないで、って。同じじゃないですか、私とあなたは。

ユカリ 違いますよ。全然違う。私とあなたは、全然違います。だって、別人ですし。

マホ だけど、同じだから会えて嬉しいんじゃないですか。同じ辛い気持ちを持って、苦しんでいて、それで、同じ呪いにかかっている。一人だと苦しみ負けそうになりそうですけど、でも、二人なら、立ち向かえる。そんな気がするんです、私。

ユカリ 私はまったく、そうは思いません。

マホ どうしてそんな心にもないこと言うんですか？

ユカリ 勝手に人の気持ち、決めないですよ。

マホ ……。

ユカリ この時の私は、頭のネジみたいなの、いつも我慢している何かが外れてしまっていて、普段なら、というか今までは言わなかったようなことを、凄いい勢いで言ってしまった。ぶつけて、しまった。

ユカリ た、確かに、私とアナタは、その、今の症状は、同じような、というか、に、似ている部分がある、ある、かもしれないけど、だけれど、

その中身、本質みたいところは、全く別で、その所を、棚に上げて、同じ、だとか、共感できる、なんていう風に言われるのは、すごく、いや、ものすごく、心外です。侵害されています、心を。

あなたが、どういう体験をしてそうなったか、私は全く知りませんが、私が、今、こうなっているのは、あなたなんか共感してもらったためじゃないですから。

マホ どういう体験をしたか、私、さっきお話したじゃないですか……。

ユカリ わかっていますよ、聞いてなかったって意味です！

あ、なんか、すみません、突然走り出して、突然こんな、ぶ、ぶつけて。すみません、意味わかんないですよね、私も意味わかんないですよ。

マホ ユカリさん……？

ユカリ それでも、なんか、許せなくて。そう、許せないんですよ、多分そうですね。別に救われたいと思っただけだし、これで救われるとも思わないです。

あなたはどうか知りませんが、でも、自分が少し浮上？浮上するため、私を使わないで欲しいんですよ。その夕メに、私を、世間一般にありふれた、症状みたいに、ああ、風邪ですね、ただの。みたいな言い方しないで。

ユカリ マホさんは、流石に言葉を失い、困ったように私を見ていた。

私はもう、自分の口から出てきた言葉に自分で飲み込まれそうになり、マホさんの顔なんかみれなくなっただけ、ごめんなさい、と小さな声で

吐き捨てるようにして、走り去った。マホさんが追いかけてくる気配はなかった。泣きながら走った。久しぶりに走った。暑いし、すぐ止めたかった。でも、それはあまりにダサイから、必死に走った。

マホ、去る。座っているユカリ。

ユカリは泣いている。震える手を必死に納める。と、左手の異変に気づく。肩まで石化が進んでいるようだ。それに気づき、先ほどまでとは別の理由で、呼吸が荒くなる。

ユカリ 怯えていました。自分の気持ち、吐きだした自分に。その行為に。

なんとということをしてしまったのか、後悔に捕らわれていました。

取り返しのつかないことをしてしまいました。ほら、やっぱり恐ろしい。

自分を伝えることは、怖いことだ。あんなに上手くいかないし、

伝えたところで、ちゃんと理解もされない。今日会ったばかりの人を、傷つけてしまった。黙っていられたなかった自分を私は強く責めました。

ユカリ 私は自分を責めて涙を流しながらも、トモミが来るのを待っていました。

待ち合わせなど勿論していません。ただ、この間の様に、都合のいいドラマの様に、きつと現れるだろうと思っていましたからです。いや、この時は、信じてやみませんでした。

ユカリ、ちらちらと辺りを見ている。

ユカリ しかし、10分ほどこの場にいてもマホさんすら現れる気配がなかったの、私は、暑さに負け、部屋に戻ることにしました。

自分の部屋に戻ってくる。

ユカリ 自分の部屋に入った途端に、それまで静かだったスマートフォンが鳴りました。マホさんからのメッセージが届いていました。

マホ、現れる。

マホ ユカリさん。今日は、お会いできてとても嬉しかったです。

ユカリさんの気持ちも考えず、私ばかりお話ししてしまいすみませんでした。あんな風に叱ってくれて、私はとても嬉しかったです。いつもは、遠くで溜息をつかれたり、SNSで悪口を書かれたりするばかりだったので、新鮮でした。ユカリさんとは、本当の友達になれそうな気がします。もしよければ、また会ってくださいませんか。飲みそびれたアイスコーヒーをまた飲みに行きましょう。そして

ユカリ、急いでスマートフォンを操作する。マホは消える。

ユカリ 私は、慌てて自分のアカウントを削除しました。

今の私には、この文章は、こういう風にしか読めなかったからです。

マホ、現れる。

マホ あんな風に大声でわめくなんて、あんなマジで意味不明だな。

救い様の無いバカだよ。生きてる価値無いんじゃないね。

お前の住所はもう割れてるからな、覚悟しとけよ。

……殺してやる。殺してやる殺してやる殺して——

ユカリ すみませんでした、本当に！！

マホ、今度こそ消える。

ユカリ もう、嫌だ……。

ユカリ、ふらふらと部屋の奥へと消えていく。
場所は変わって劇団の稽古場。トモミと先輩が話をしている。

トモミ 本当に取材、してないんですね？

先輩 してないよ。ユカリとは、この間見学に来たとき会っただけ。

トモミ その後は勿論、その前も、会ってない。だから、勘違い。偶然。

トモミ それにしては……

先輩 なに？そんなに似てるの、今回の主人公と。

トモミ ……はい。

先輩 それはもしかしたら、ユカリが大学生の時からあまり

変わってないってことかな。

トモミ どういうことですか。

先輩 今回俺が書いたのは、あの時皆で作ろうとした絵本の話なんだ。

トモミ 新時代版、あおいとり？

先輩 ……そう。

トモミ それが？

先輩 その時、あおいとりを探しに行く少女のモデルにしたのが、

ユカリだったんだよ。

トモミ え？

先輩 あの中で、一番、それっぽい人を選んだ。

トモミ それっぽいって。

先輩 自分だけの幸せを探している人。

トモミ それが、ユカリ？

先輩 あの頃はね。……まあ、今でも、なのかもしれないけど。

トモミ いや、あの子は……

先輩 今までも、か。

トモミ 先輩が書いたみたいに、なるんですか、じゃあユカリも。

先輩 おいおい、これはあくまでお話。空想の世界だよ。

現実、その限りじゃないよ。

トモミ でも……あまりにも似てるから。

先輩 それ、でも本当？

トモミ 本当ですよ。

先輩 こんな、親にも兄弟にも恵まれず、人間関係もグズグズで、
生きる価値を見いだせない、死んだ顔して生きてる女？

トモミ ああもう、ユカリ。

先輩 ひどくない？友達でしょ？

トモミのスマートフォンが鳴る。

トモミ あ、噂をすれば。

先輩 え。苦情じゃない？苦情じゃない？

トモミ そんなわけないでしょ。……ん？

先輩 なに？

トモミ みてください、これ。

先輩 ……助けてよう。

トモミ これ、なんだと思います？

先輩 SOS、かなあ。

トモミ でも、電話じゃ無く、メールで。

先輩 たすけて、で終わらず、よう、がついてる。

トモミ 仮に、これ、言葉を足すとしたら、なんでしょう。

先輩 ……いい加減、助けてよう。

トモミ 四の五の言わずに、助けてよう。

先輩 助けてよう、そろそろ。……少し、入ってるよね、苦情のニュアンス。

トモミ 出てますよね、とつとと感。

先輩 とつとと感？

トモミ とつとと感。

間。

先輩 なあ、とつとと感で——

トモミ さあ、行かなくちゃ、親友が呼んでる。

先輩 おい。

トモミ 形はどうあれ、大きな違いじゃ無いですか？

先輩 ん？

トモミ 親友、友達……ううん、他の人に、助けを求めた。これは、

この主人公と、大きく違うところです。

先輩 ……そうだな、そうだ。

トモミ よし、今助けに行くからね。死んだ顔して、それでも生きてて！

トモミ、去る。

先輩 だから……友達だよ？

ユカリの部屋。ユカリと女性が居る。

女性　なんでそうなるのよ。

ユカリ　だって。

女性　助けてようって。もつと言い方あるでしょ。

ユカリ　上手い言い回しが思いつかなくて。

女性　助けて。でいいじゃん。ようが要らないんだよ。

ユカリ　それだと何か、ホラー映画みたいじゃん。

女性　でも、よう、がついたせいで、苦情みたいなニュアンス含まれたよ。

ユカリ　怒って来てくれないかも。トモミ。

女性　連絡は返してくれるでしょ。

ユカリ　読んでるはずだけど。

女性　練習中なんじゃない？……返事くらいできるか。

ユカリ　嫌われたらやだなあ。

女性　そもそもさ。

ユカリ　ん？

女性　トモミに来て貰って、どうすんの？助けて貰うって、なに？

ユカリ　……。

女性　え？

ユカリ　……なんだろう。

女性　は？

ユカリ　とっさに、連絡しちゃった。

女性　めんどくさめの彼女か。

ユカリ　だって……。

ユカリ　私は、自分の身体の自由がきかなくなっているのを感じていた。

左手の小指から始まった石化は、左肩まで進行し、

目をつむれば、電車の中で出会った眼に捕らわれた。

生かされている感覚があった。

それは、裏を返せば、いつでも殺されるといふ感覚だった。

トモミに送ったSOSがきちんと届くことを祈った。

きっと私はこのままでは殺されてしまう。他ならぬ――

女性

ねえ。

ユカリ、女性に引き戻される。

女性 大丈夫？

ユカリ ……。

女性 ユカリ？

ユカリ どうしよう。

女性 ん？

ユカリ 足が……動かないよ。

女性 え……？

ユカリ 足が……。

女性、ユカリの足に触る。

女性 どうして……。

ユカリ 言ったでしょ。あの眼に、捕らわれてるんだよ。

女性 それが、何だって言うの……？

ユカリ あれは、私。私は、あの眼で生きている。あんな顔をさらけ出して、

私は、生きている。左腕を引きずって。そんなの……そんなの

女性 違う。違うよ、あれは、あなたじゃないでしょう。

ユカリ あなたの言ったとおり。私の世に、あおいとりはいない。

あんな顔した女の所に、あおいとりは居るはずない。

あおいとりは、もつと、そう、やっばりすぐそこにあるものなんだよ。

先輩、やっばりそうですよ。本当のあおいとりは。

女性 彼氏なんかじゃない。友達とも違う。タツパーのてづくりのおかずも、

スマホもお湯の出るシャワーも、違う。そういうことに幸せを感じることが

あったとしても、そうじゃない、それは青い鳥じゃない。そうでしょ

ユカリ それに私はしあわせを感じないから。あおいとりの存在を感じないから。

女性 そんなことない、そんなはずない

ユカリ じゃあ、この眼は何？私を捕らえるこの眼は！

あんな眼をした女は……もう、終わってるんだよ。終わっちゃってる。

ほら、みて、触って。

ユカリ、右手の方を見る。

女性 え？

ユカリ こうしている間にも、どんどん石になっていってる。

女性、右手に触る。驚く。

女性 うそ……

ユカリ このまま全身石になって、私もおしまい。

女性 だめだよ、だめ。

ユカリ 息も苦しくなってきたな……。

女性 何を受け入れてるのよ、あんた本当に！

ユカリ 受け入れてなんか無いよ！

女性 え？

ユカリ 受け入れられるわけないでしょ、嫌だよ、怖いよ、だから言ってるじゃん、助けてようって！

女性 そもそも、人にどうこうできる問題じゃ無いことぐらい……

ユカリ こうなったらもう一人じゃ何にも出来ないでしょ！

チャイムが鳴る。

トモミ（声）ユカリー？いるー？ユカリー？

ユカリ ……遅いよ。

ユカリ 私は、また、出来すぎたドラマの様だと思いました。けれど、

心の底から、助かった、まだなんとかなるかもしれない、とも思いました。

トモミ ユカリ、入るよ……

トモミ、入ってくる。

ユカリ メール、見てくれたの？

トモミ あ、うん。鍵空いてたけど、なに、どうしたの？

ユカリ 助けにきてくれたの？

トモミ 一応……。苦情混じりのSOSもらったからね。

女性 ほら、苦情まじりって思われてる。

ユカリ ごめん。ちょっと照れた。

トモミ なによそれ。

ユカリ 照れたついでに、もう一つ、いい？

トモミ なに、あんた随分素直じゃん。

ユカリ たまにはそういう日もあるよ。
トモミ たまには、っていうか、初めてに近くない？
ユカリ お願いがあるの。
トモミ なに？
ユカリ 聞いてくれる？
トモミ う、うん、気味悪いくらい素直なあんたに免じて。
なんでも言いな。
ユカリ ありがとう。
トモミ なに、ほんと、どうしたの？……ユカリ、これ……
ユカリ あ、うん、進んじやったみたい。
トモミ わかった病院ね！
ユカリ 違うの。
トモミ 違うんでしょ、むしろ唯一の正解でしょ
ユカリ そんなところ言っても、仕方ないんだよ。
トモミ なんでそんなことわかんよ。
ユカリ ごめん。
トモミ なにが。
ユカリ 分かってるんだ、私。
トモミ なにを。
ユカリ 私が、こうなる原因、みたいなの。
トモミ はあ？なんでよ。
ユカリ 自分の身体のコトだもん。ううん、自分の心のことだもん。
見えていなかった、だけだから。
トモミ ……何言ってるの？
ユカリ だから、お願いがあるの。
トモミ だから？まあ、うん、なによ。
ユカリ 連れて行ってほしい、場所があるんだ。

音楽。転換。

海。先輩におぶられて、ユカリが現れる。それにトモミが後ろからついてくる。少し遅れて、女性も来る。

ユカリ 先輩、この辺で。

先輩 お、おう……。

先輩、適当なところにユカリを下ろしたあと、座り込む。

先輩 だぁぁ……。

トモミ ちょっとだらしないんじゃないですか？

ユカリ すみません、重かったですよね。

先輩 距離。距離。

トモミ 距離がなんですか。

先輩 タクシーつかえよ……なんで俺がおんぶだよ、あそこから。

トモミ だって微妙な距離なんだもん。

先輩 なんだもんで……。

ユカリ ありがとうございます。

先輩 いや、いいけどさ……。

先輩、とうとう倒れる。

トモミ それで……？

ユカリ ん？

トモミ ここに来て、何があるの？

ユカリ なにもないよ。

トモミ はぁ？

先輩 はぁ？

ユカリ なにもないけど、ここに来なくちゃいけない気がしてたんだ。

トモミ どうして？

ユカリ わかるでしょ。二人なら。……わかるはずだよ。

トモミ え？

ユカリ 私を作品のモデルにしたことのある、二人なら？

間。

トモミ え……？
ユカリ 別に怒ってるわけじゃ無いよ、トモミ。嬉しいんだから、私。
トモミ ……知ってたの。
先輩 どういうことだよ。
トモミ 私、今、小説書いてるでしょ？
先輩 ああ、うん。
トモミ その小説のモデルに、いつの間になってたのが、……ユカリだったんですよ。
先輩 そうだったのか。
トモミ はい。まあ、だから自ずと先輩の脚本の話と似たような話になってしまったわけで。
先輩 それでか。
トモミ はい。もしかして、と思ったんです。……でも、なんで知ってたの、ユカリ。
ユカリ 私、これ、劇団の人にしか言っていないんだけど。見学来たとき？
トモミ そうなの？
ユカリ うん。何年友達やっているとってるの。見てれば分かるよ。
トモミ 恐れ入りました。
ユカリ 小説だったか。書いたら読ませてね。
トモミ ン。ありがと。
ユカリ だからもう、気使わなくてもいいからね。
トモミ え？
ユカリ ご飯作ってくれたり、こまめに連絡くれたり。
トモミ ……それは別に心配してさ。
ユカリ 大丈夫だから。
トモミ はい。
ユカリ 取材っていうの？いつでも、来て。
トモミ ……ありがと。
ユカリ 先輩は。
先輩 ン？
ユカリ まだ、書いてるんですね、あおいとり。
先輩 ああ、うん。書けなかったままだったからな。
ユカリ うん。そのままじゃ、進めない、ですもんね。
先輩 一度、自分の中に生まれたものは、どんな形であれ、外に出さないと、他の物を生み出すことは出来ないんだと思う。ある種、呪いだな。
トモミ くすぶり続けますもんね、出てくるまで、ずっと、この辺で。
先輩 そう。だからやっと、これで俺も次に行ける。
ユカリ よかったですね。

先輩 ああ。

ユカリ それから。私は暫く海を眺めていた。トモミや先輩が何か話しかけていたような気もするけれど、耳に入ってこなかった。ふと気が付くと、二人とも離れたところにいた。気を、きかせてくれたんだと思う。声くらいかけてくれればいいのに、とも思ってたけれど、きつとかけてくれていたに違いない。

女性 久しぶりに来たね。

ユカリ うん。

女性 あの日以来、避けてたもんね。

ユカリ うん。

女性 どう？

ユカリ ん？

女性 随分と、眺めてたけど。

ユカリ どうだった？

女性 んー、すこし、思い出した。

ユカリ 呪いにかけられた私はさ、次に進めないんだよね、いつまでも。

女性 あおいとり、捕まえない限りはね。

ユカリ ただのあおいとりじゃ、ないでしょ。

女性 そう。自分だけの、あおいとり。

ユカリ そいつを捕まえるには、まだ時間かかりそうだけども。

女性 いい加減、次には進みたいなあと思ったんだよね。

ユカリ そうだね。死んだままは嫌だもんね。

ユカリ うん。……生き返りたい。

女性 しんどいと思うよ。生き返るのも、生き返ってからも。

ユカリ うん。生き方を変えること、だからね。

女性 生き変える。

ユカリ 呪いのピンキーリングを捨てて以来、ここにきて、今、自分に

必要なコトをしている。見て見ぬ振りをしてた、自分と向き合ってる。

それは、生き変えるために必要なこと。また、自分の足で外に出て行くために、

必要な、こと。

女性 怖いよね。自分の気持ちを外に出すのは。それはきつと変わらない。

でも、たまには、自分のために、出してあげることも大切なことだよ。

遠回りしたけど、無駄にならなくて、よかったね。

ユカリ ……うん。

ユカリ 私の両手は、石になったままだったから、顔を覆うことは出来なかった。私の両足は、石になったままだったから、走り出すことも出来なかった。だけれど私の心は、まだ石になっていなかったようで、涙がずっと、あふれ出ていた。

ユカリ 私にとって、他の人の経験は、何の意味も無い。

皆そうだから、とか、皆が通る道だから、とか。

私にとってそれは、私自身の否定だった。あなたはあなたではなく、他の人です、と言われている気になった。

たとえ、私の悲しみの原因が、小説や演劇すら取り上げない、どんなに平凡なものでも。特別なものじゃないとしても、私の悲しみが、どんなに浅いものだとしても。

ユカリ それを私が悲しんではいけない理由にはならないのだ。

流せなかった涙が、私を石にする。叫べなかった思いが、私を石にする。そうしていつの間にか、私は眼から死んでいく。私は眼から死んでいく。

ユカリ 私が信じた真実は、きつと、夢みたいな嘘だった。

嘘になってしまった夢だった。しかし何の罪も無い。

その嘘に、時に、言葉に、人に。誰も、何も、悪くない。傷ついた私だけが、残るから、きつと私だけが悪いんだ。

ユカリ でもやはり、あおいとりは、私の世には存在しない。

それは私がまだ何を、あおいとりにするか決めていないから。何を幸せだと思えるか。それすら知らないまま、深い絶望の底にいた。底にいた、気になっていた、だけだった。

ユカリ 私ぐらい私を、特別扱いしていいじゃないか。

そんな時間があったって、いいじゃないか。

私ぐらい私を、悲しませてあげていいじゃないか。せめて涙の流れる間は。

波の音。海の音。

やがて、トモミが近づいてくる。

トモミ ユカリ？

ユカリ ……。

トモミ 泣いてるの？

ユカリ ……うん。(涙を拭う)

トモミ ユカリ、それ……。

ユカリ あ、うん、動くようになってきた。

トモミ 良かった……。

ユカリ ごめんね。

トモミ いいんだよ。……皆、そうだって。

ユカリ え？

トモミ 皆、そうやって、なんかさ、わかってくんだって。

傷ついたり、泣いたりしてさ、成長してくんだって。

皆そう。皆そう。だから、大丈夫だよ。

みーんな。私も先輩も、いや、知らない人も、みーんな、

そうやって、強くなってくんだから。

ユカリ あ、あの、あの。トモミ。

トモミ ん？

ユカリ ごめん、いま欲しいのそれじゃない。

トモミ え？

ユカリ 私が欲しいの、それじゃない。それは、いらない。

トモミ ……そ、つか？

ユカリ うん。

トモミ なんか、ごめんね。

ユカリ うん。いいよ。ごめんね。

トモミ うん。

ユカリ うん。

波の音。転換。

ユカリの部屋。

ユカリと女性がいる。

女性 忘れもの、無い？

ユカリ うん、大丈夫。

女性 チケット、持った？

ユカリ 持った。

女性 よし。

ユカリ 海からの帰り道、自分の足で歩いた。それから、新しいベッドを買った。

インターネットの向こうの彼には、やっぱり会えませんという連絡をくれた。

返事は無い。マホさんには、もう一度アカウントを作って、連絡を取った。

来週、アイスコーヒーをリベンジすることになった。

今日は、トモミの劇団の公演を見に行く。

ずばり「碧い鳥」と、タイトルがついたその公演は言わずもがな、

先輩があの時書けなかった作品をきちんと書き上げたものだ。

会場では、トモミの書いた小説も販売されるそうだ。

小説のタイトルは「ゆらぎ」

内容は聞いていないが、どちらもモデルとなったのは、私。

なんというか、くすぐったい。

ユカリ あの桜の木の約束は、もう果たされないだろう。だけど、きっと忘れることは無い。

……そんな私はあおいとりを、捕まえられる日が来るだろうか。

今は、捕まえられなくてもいい。そう考える。

……いい加減、だと思っただろうか。単純なやつだと笑っただろうか。

何を思われても、言われても、いい。

せめて、私ぐらいはそんな私でも認めてあげよう。

少なくとも今は、そう思っているから。

呼び鈴が鳴る。ユカリ返事をして。カバンを何気なく左手で取る。

ユカリ じゃ、行ってきます。

左手でとったことに気が付き、ゆっくりと左手を見て、触る。手のひら、甲、親指、順にさわっていき、小指を握る。カバンを持ち、出かけていく。 おしまい。